

清少納言枕草紙に、湯は七くりの湯、有馬の湯、玉造湯云々、ありまのゆ天下にあらはる、玉造の湯、何處にあることを知らず、七くりのゆは、伊勢榊原にあり、今に至りて湯治のために往來するもの多し、奥田蘭汀生の物語なり、津の領内の由となり、

〔夫木和歌抄二十六信濃なくりのゆ

橘俊綱朝臣

いちしなる岩ねにいづるな、くりのけふはかひなきゆにも有哉

此歌は、ふしみにゆわかして大納言經信卿をよび侍けるにござりければ、つかはしけると云、

返事

大納言經信卿

いちしなるな、くりのゆも君のためこひしやますときけば物うし

家集題不知

二條太皇太后宮肥後

よの人のこひのやまひの薬とやな、くりのゆのわきかへるらん

上野國
草津温泉

〔運歩色葉集久草津ユ湯

〔草津温泉來由記〕上州吾妻郡草津の邑に温泉あり、略此湯硫黃明礬の精氣流れ出て、除病の効

いちぢるしと、抑硫黃は性熱にして、病瘡を除き、陽精をさかんにし、寒冷を拂ふ、明礬は其味ひ酢

くして、諸毒を解し、治症多能也と醫典に云侍り、しかはあれど、吾が所見のごときは、山は山水は

水、自然の温泉にして、自然の功用を具せり、他の湯多くは此二氣によるといへば、此説も又宜べ

なり、略建久三のとし秋八月の日、將軍源頼朝公、兼て此靈湯名を、荒草の際に没し、歩を古徑の

邊に絶し事を歎き、再び此湯を開き、試に浴せんとて、群臣を率し、此所に来りて、一幽谷を臨給ふ

に、沸湯空を吐て、恰も鑊湯のごとくなるを見て、すなはち欣躍して開湯し給ひ、數ケ日の湯霏を

わかち其効驗品々あり、或は將軍初て浴を試み給へば、御座の湯と稱し、又冷暖相和ひて、幼老を